

抄録

シユワルトツマン氏現象に據る「チフス」及「バラチフス」菌屬の毒性物質の本態に關する研究

Nik. Stoljhw

(Zentralbl. f. Bakt. Orig, 1925, 135, 230)

一九二八年シユワルトツマンは「チフス」菌の「フイオン」培養（六—八日）の濾過液を家兎の皮内に接種し、二〇—二四時間後同一濾過液を同一動物の靜脈内に注射する時は、二—三時間にして注射局所に重症の出血性壊死性反應の起ることを發見した。著者は本反應を應用して題記の研究を行ひ、大略次の如き成績を得た。

一、「フイオン」培養濾過液の代りに、馬血清、牛乳、「ノゾオプロテイン」、「オムナヂン」等を以て前處置を行ひ、シユワルトツマン氏反應を檢査したが、陽性の成績は得られなかつた。又毒性濾過液を皮内に注射する代りに、皮膚に傷をつけ、二〇—二四時間後「チフス」濾過液を靜脈内に注射しても、出血性壊死性反應を惹起せしめることは出来なかつた。

二、「チフス」菌の「フイオン」培養の濾液を乾燥して軟膏を作り、之を剃毛した家兎の腹部皮膚に塗擦し、或は濾過液を種痘の如く又はビルケーの皮膚反應の如き方法で皮膚に接種し、二〇—二四時間後濾過液を靜脈内に注射しても認むべき反應は起らな。

三、前處置に於て「チフス」菌の培養濾過液を皮内に注射し、後「バラチフス」菌屬の培養濾過液を靜脈内に注射すると、陽性の反應が

起る。

四、シユワルトツマン氏現象が一度陽性に起ると、其後少くとも四日間同一家兎に於て陽性の成績は得られない。

五、シユワルトツマン氏現象を起し得る量の濾過液を靜脈内に注射して、家兎を出血性壞疽に對し、又濾液の一般毒作用に對して活動性に免疫することが出来る。

六、「チフス」或は「バラチフス」菌の培養濾液を擦ぬ皮内に接種して、家兎に於て皮膚の局所免疫を達成するを得た。

七、家兎に於ける出血壞疽に對する活動性免疫は絶対的ではないけれども、特異性である。

八、「チフス」及「バラチフス」菌の培養濾液を以てするシユワルトツマン氏現象は、「モルモット」に於ても起すことが出来た。

九、余は重症の「チフス」患者に於て、特發性に現はれる出血性壊死性反應を發見することが出来た。此反應は家兎に於て觀察されるシユワルトツマン氏現象と同一である。

一〇、同様の現象が他の菌に於ても觀察される。

一一、家兎に於てシユワルトツマン氏現象を惹起する毒性物質は、「チフス」の重症の時期に尿中に多量に排泄される。(N.H.)

淋菌と流行性腦脊髄膜炎菌の新培養法

H. Neumann, Klin. Wschr. 1936, Nr. 2, S. 53.

淋菌を培養した平板を Plastikta で密閉すると平板内の氣壓が低くなり、爲に酸素量も少くなつて淋菌の發育が良好となる。之を著者は C-Platte と稱へた。更に此平板内に雪狀炭酸を加へると平板内に CO_2 が増加して淋菌の發育が C-Platte よりも猶良好となる。即ち培養成績は總て陽性である。之を D-Platte と稱へ普通の培地